

伝え

発行 日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部 伝承文学研究室内
☎03-5466-0224

口承の時間と空間

日本口承文芸学会 会長 三浦 佑之

古代文学と口承文芸とを行き来しながら伝承について考えていると、普段気づかない興味深いことがいろいろ見えてくる。

たとえば、古事記で、アマテラスを天の岩屋から引き出す時、演出家であるオモヒカネの神の脚本に従って神々は祭りをし、最後の場面で鏡を見せる。鏡に映った姿に驚いたアマテラスをタチカラヲが岩屋から引き出して、世界は光を取りもどすというよく知られた神話だが、あの、鏡を見て驚く場面は、昔話「松山鏡」とおなじモチーフだとしか考えられない。天皇家の祖先神アマテラスが、ちょっと間抜けな笑われ者の神だったということに気づくだけで、なんだか楽しくなってしまう。播磨国風土記には、一本の矢で二羽のカモを射落とすサキタマという弓の名人がいて、鴨取り権兵衛のご先祖かと思ってしまう。

このような話を読んでいると、神話の零落したものが昔話であるという柳田国男以来の信仰的前提も疑わしくなる。もちろん柳田の言う神話は、古事記のような書かれた神話ではないが、少なくとも、話を語ることの楽しさは、古代でも現代でも変わら

ないはずだと思わされる。

瞬間的に消えてしまう音声を通して伝えられる口承文芸にとって、時間は大きな障碍であるとともに、火事や紙魚や湿気など大敵の多い書物を何百年も守り伝えることに比べれば、語りが千年の時間を超えることなど簡単なことなのかもしれない。口承の時間というのは、我々の生活時間とまったく別の単位のなかにあるのではないだろうか。

空間についても、同じようなことが言えるはずだ。必要があって最近、「瓜子姫」について考えていたのだが、東北型と西南型との違い、殺される瓜子姫の東北と中国地方との繋がりなどに目を向けていると、伝承が空間を超えていく時の、超え方といったものに興味をそそられる。とても信じられないようなスピードで、くまなく張りめぐらされた網の目の上を伝承は走り廻っているのだろうか。

昔話研究の膨大な恩恵に浴しながら、伝承における時間や空間の超え方について、今しばらく、考え続けてみたいと思っている。

○1999年6月・沖縄国際大学（宜野湾市）にて開催された、第23回日本口承文芸学会大会の公開講演、並びにシンポジウムの報告をします。

公開講演 平敷令治氏

沖繩の綱引

《報告》 遠藤 庄治

講演に先立って、「にっぽん綱引ー農耕海洋民の壮大な儀式」（日本テレビ）のビデオによって、東北から沖縄に広がっている日本の綱引きと海外の韓国綱引きを紹介し、さらに、沖縄でも最大の綱引きである「那覇の大綱挽」（RBCテレビ）のビデオによって、沖縄の綱引きを紹介した。

その上で、綱引きが濃密に分布しているのは、九州、沖縄であるが、本州でも鳥取では57か所で行われ、綱引き行事が行われていないのは、北海道、岩手、宮城、栃木、静岡、長野、山梨、愛知、島根、香川の一道九県であること。綱引きの期日は、小正月が最も多く、そのほかに、端午の節句、盆、八朔、十五夜、亥の子の祭りなど二十種の異なる日に行われ、綱の形には一本綱、蛇型の綱、雌雄の綱などがあること、また綱の引き方には、綱を担ぎ回り、綱を引きずり、引いてから切る、引いてからトグロ巻きにするなどが行われていること。さらに、綱引きは、年占・豊饒祈願として子供組と青年組、地域対抗、男女対抗などの双分組織によって行われ、綱引きが終了した後は、大草履を添えて放置、藁人形を焼く、綱を切る、綱を川に流す、綱を焼くなどの方法で綱を処理していることが報告された。

以上の本土における綱引きの紹介の後で、沖縄の綱引きが紹介された。沖縄では、かつては三百十か所で行われ、現在も百七十か所で、正月、六月ウチマー、六月カシチー、六月シヌグ、盆、八月カシチー、八月十五夜などで行われているが、早魃のときには雨乞い行事として行われることがあり、また、年に二回引くところ、何年かの周期で引くところもあるとのことであった。沖縄の綱の形は、雌雄の綱を「かんぬき」と呼ばれる棒で

結合するものが多いが、中には「かんぬき複数型」もある。綱の引き方は、綱担ぎの後で引くところと綱の引きだけの所があり、年占として東、上、北の側が雄綱で、西、下、南の側が雌綱を引き、東が勝つと、ユガフ（世果報）になるとする所が多い。綱引きの後、海や川に綱の一部を流すか焼く、綱の一部と藁人形を焼く、綱の一部を焼いてから流すなどの方法で処理する。最後に本土、沖縄、韓国の綱引きを比較して、講演のまとめとした。

公開講演 遠藤庄治氏

沖繩伝承の天と地

《報告》 丸山 顕徳

日本口承文芸学会大会の講演の一人は会場校の遠藤庄治氏、題目は「沖繩伝承話の天と地」。講演資料はA4プリント用紙62頁に渡る貴重な沖繩の民話資料131話を掲載。その項目は、「沖繩の天」、II「天神と地」、III「天界往来」、IV「天の子」の4項目。全内容に渡って紹介は不可能であるので、ここでは天から降りてきたアーマンチャーの話に限定して紹介する。まず、演題の「沖繩伝承話」の命名についての説明があった。民話とか昔話という題目にしなかった理由としては、沖繩には王様の話や高級な貴族の話が大変多く含まれており、口承書承とともに存在するが、王の一門の子孫によって現在も語り伝えられていることから民話と呼ぶよりは沖繩の口伝えの伝承を総合的に「伝承話」とするのが相応しいと述べられた。

沖繩では天のことはアマであり天下から降りて来る人のことをアーマンチャーという。沖繩で最も多く語られている天にかんする話のうち、最もよく知られているのが「天人女房」の話で、沖繩本島だけでも数話型ある。この話は中国から渡ってきて朝鮮半島を経て沖繩に南下した話と思われ、沖繩本島北部から南部にかけて点々と伝承されている。その最も知られた話が察度王の話。この王は、天女の子どもであり、宜野湾の森川の話と

して伝えられている。また多良間島には天女が天に帰ったあと夫が追っ掛けて行き天で難題を出されるといふ難題型の話も伝わっている。いわゆる天の川由来、七夕由来の話である。八重山・宮古・粟国島にかけては、七つ星つまり北斗七星の長女が地上に降りてきて孝行息子の妻になるという話がある。これが沖縄で最も多く伝わっているアーマンチャーの話である。

次に、天から降下した話で、多い話は「大歳話」。ぼろぼろの姿をして金持ちの家を訪ねる。そして断られて貧乏人の家を訪ねてもてなされる。この話で最も多い話型の結末が、金持ちが猿になる猿長者型であり、大歳話は国頭から与那国まで全地域に分布している。さらに、全地域に分布している話は、「トーカチ由来（子どもの寿命）」、八十八歳の由来話。この話の半数は天からアーマンチャーが降りてくる話である。また幼い子どもが神の国をめざして旅をして幸福になるという「山神と童子」の話がある。この中に登場するのもアーマンチャー。また「鉄門の福分」という話がある。貧乏人が天に運ばれて、そこで自分の運が少ないことを知る。天上で大金持ちになる運を借りて地上に降りる。これは、沖縄ではカニジョー（鉄門）の話と呼ばれている。以上がアーマンチャーの代表的な話である。

その他、月と日を天秤棒で担いだ大男の話。日触の由来話。金星になった姉妹の話。人間が星になった話としては、1609年薩摩の侵略に際して総大将で、薩摩に連れ去られて殺された謝名親方が七つ星となって天から琉球の行く末を見守っているという話。今も人々の間で慕われ、語り継がれているとの紹介があった。

なお遠藤氏編による民話集の一部を紹介したい。研究室刊行の『竹富島の民話』『大浜の民話（石垣市）』『小浜島の民話』『鳩間島の民話』『おきなわの民話』などの他、地方自治体による刊行物がある。『仲里村の民話』『具志川村の民話』『名護市叢書（民話関連）』『粟国島の民話』『西原の民話』『かつれんの民話（上、下）』『よなばらの民話』『いらぶの民話』『よなぐすくの民話』『宜野湾の民話（上、下）』『こちんだの民話』『いしかわの民話（昔話編、伝説編）』『いぜなの民話』『とかしきの

民話』『恩納村の民話（上、下）』『ふるさとの民話集具志川市民話集』『多良間村の民話』他。

シンポジウム

天人女房の国際比較

《報告》 遠藤 庄治

第23回日本口承文芸学会開催地の沖縄国際大学がある宜野湾市には、琉球王の中でも最初に中国と正式に交易を行ない、王城を浦添から首里に移した察度王伝説の遺跡である森の川があり、その察度王は、森の川に下って水浴していた女房を母とする伝承があることから、宜野湾市では、天人女房にちなむ「はごろも祭り」を市の行事として実施している。そこで、二日目のシンポジウムでは、宜野湾市民も関心がある「天人女房の国際比較」のテーマで行ってもらうことにし、当初の企画では、大林太良氏に全体的な国際比較、国内及び沖縄の天人女房の伝承と直接に係わる中国については、君島久子氏、さらにやや視点を変えて、西欧の「白鳥処女伝説」については樋口淳氏に担当してもらう予定であった。しかし、大林太良氏が体調不良のため、参加できないことになったので、沖縄の伝承と本土の天人女房について詳しく、業績がある福田晃氏、山下欣一氏にも急遽登場してもらい、さらに、アメリカ大陸の先住民については、三原幸久氏に、韓国については、依田千百子氏に担当してもらってシンポジウムを開催した。

最初に君島氏からスライドを用いた中国の天人女房についての発表があり、広大な中国においては、北と南の違いがあること、さらには、雲南省などの少数民族の伝承には、始祖伝承の要素も伝えられていることが、珍しい民族の映像も含めて紹介された。樋口氏は、西欧の白鳥処女伝説をタイプインデクス、モチーフインデクスで紹介し、ハートランドの要約を示した上で、白鳥処女伝説の構造を分析した。

福田氏は、関敬吾の『日本昔話集成』の「昔話の型」を紹介した上で、天人女

房の話型を「始祖誕生型」と「幸福婚姻型」に分け、主として、沖縄における天人女房の昔話の各類型について紹介してもらい、その上で山下氏からは、本土・奄美諸島の天人女房について、始祖説話を含む伝承を述べてもらった。三原氏からは、天人女房について考察する際に日頃は欠落しがちな南米大陸の先住民が伝える天人女房について紹介してもらい、依田氏には、韓国の天人女房について述べてもらったが、その中で、韓国の天人女房には、始祖伝承に展開する伝承がないのは、韓国社会の強固な父系性によるものだという指摘が聴衆にも強い印象を与えていたように思われる。吉田敦彦氏には最後のまとめをしていただいた。ただし、六名の方の発表の後で、フロアからの発言も十分に受け止めるべきであったが、その時間がほとんどなかったことは、司会を担当した私の責任である。

生涯の研究のまとめとして、大著を次々に発刊しておられる大林太良氏に参加してもらえなかったことは残念ではあるが、各氏の内容豊かな発表によって、大会に参加した方々も満足しておられたようであり、少数の参加ではあったが地元宜野湾市民からは極めて好評であった。

なお、このシンポジウムの内容に初日の講演で「沖縄伝承の天と地」として提供した百二十一話も参考資料として加えてもらえれば幸せである。

受贈書リスト

・「民具マンスリー」31-3~12号、32-2号 神奈川大学常民文化研究所 1998.6~19 99.5

・「常民研NEWS」1~3号 神奈川大学常民文化研究所 1998.7~1999.1

・「民俗博物館だより」25-1、2号 奈良県立民俗博物館 1999.1、3

・「同志社国文学」49、50号 同志社大学国文学会 1999.1、3

・「歴史民俗資料学研究」4号 神奈川大学大学院 1999.2

・『どーびんさんすけ さるなまぐ』山田和郎・山田裕子 みやぎ民話の会 1999.2

・「国立歴史民俗博物館研究報告」77、80、82号 1999.3

・「民俗博物館研究紀要」16号 奈良県立民俗博物館 1999.3

・「千葉大学ユーラシア言語文化論集」2号、別冊1号 千葉大学文学部 1999.3

・「紀要」9号 大田区立郷土博物館 1999.3

・「白い国の詩」1999年3~8月号 東北電力株式会社地域交流部 創憧社 1999.3~8

・「国文学研究資料館館報」52号 1999.3

・「甲南国文」46号 甲南女子大学国文学会 1999.3

・『中国地方農村の口承文芸—語り物の書・テキスト・パフォーマンス—』井口淳子 風響社 1999.3

・『馬淵川流域の民俗』青森県環境生活部県史編さん室 青森県 1999.3

・「函館昔話」11号 函館パルス企画 1999.4

・「日本研究」19号 国際日本文化研究センター 角川書店 1999.6

・「聴く・語る・創る」7号 日本民話の会 1999.6

・「日本民話の会通信」144号 日本民話の会 1999.7

・『中国の伝承曼陀羅』百田弥栄子 三弥井書店 1999.7

・『世界の妖怪たち』日本民話の会・外国民話研究会 三弥井書店 1999.7

・『世界の魔女と幽霊』日本民話の会・
外国民話研究会 三弥井書店 1999.7

ありがとうございました。今後ともご協力お願い申し上げます。

----- **事務局報告** -----

●機関誌「口承文藝研究」既刊号の販売
について

第79回運営理事会(1998.10.17)において、刊行後3年を経過(発行されている最新号から3号分遡る号まで)した機関誌「口承文藝研究」を一律500円(送料別)で販売することに決定しました。会員外も可。現在、19号までが、その対象となります。20号に「『口承文藝研究』総目次」があります。1号から4号までは在庫がありません。また、残部僅少のものがありますので、お早めに。問い合わせ・申込みは、事務局「既刊号」係まで葉書にて。発送時に、送料込みで代金を請求いたします。

● 1999～2000年度 日本口承文藝學會 役員名簿

(五十音順、○印は運営理事)

- 会長 ○三浦 佑之 (東京)
 理事 ○飯倉 照平 (関東)
 ○磯沼 重治 (東京)
 ○大島 廣志 (東京)
 ○萩原 眞子 (関東)
 ○川田 順造 (関東)
 君島 久子 (近畿)
 ○小島 美子 (東京)
 小島 瓊禮 (九州・沖縄)
 ○酒井 正子 (東京)
 佐々木 達司 (北海道・東北)
 鈴木 昭英 (中部)
 ○高木 史人 (中部)
 武田 正 (北海道・東北)
 竹原 威滋 (近畿)
 立石 憲利 (中国・四国)
 田中 瑩一 (四国・中国)
 ○徳田 和夫 (東京)
 ○中村とも子 (東京)
 萩中 美枝 (北海道・東北)
 ○兵藤 裕己 (関東)
 ○藤井 貞和 (東京)
 真鍋 昌弘 (近畿)
 ○間宮 史子 (東京)
 丸山 顕徳 (近畿)
 ○宮田 登 (関東)
 山下 欣一 (九州・沖縄)

- 監事 小島 菜温子
 保坂 達雄
 幹事 立石 展大
 内藤 浩誉

各委員会

- ☆会 長 三浦 佑之
 ☆機関誌編集委員会
 委員長 飯倉 照平
 酒井 正子
 高木 史人
 徳田 和夫
 藤井 貞和
 間宮 史子
 ☆研究例会委員会
 委員長 萩原 眞子
 川田 順造
 小島 美子
 兵藤 裕己
 ☆庶 務
 委員長 大島 廣志
 磯沼 重治
 中村とも子
 ☆会 計
 委員長 宮田 登

○伝え25号は、1999年9月の発行予定でしたが、大幅に遅れました。
 ここにお詫びいたします。(編集担当)

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。
 入会金 1000円 年会費 4000円
 入会申込書請求先：☎150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
 國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内
 日本口承文芸学会事務局 ☎03-5466-0224
 送金先：[郵便振替] 00180-4-44834
 The Society for Folk-Narrative Research of Japan
 c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,
 4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150-8440, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、大島広志・磯沼重治・中村とも子です。